

## 週日の説教

金 大烈 神父 2010年3月16日(火)

### 《自分から先に温かい心を！》

今日の福音であるヨハネ5・1 3a,5 16の内容を読むとき、いつも自分の胸が痛くなるのを感じます。冷たくて、情けない、自分のことばかり考えてしまうのが、今の世の中の歴史なのではないかと思ってしまう。

「病気で苦しんでいる人が38年間横たわっていた」と書いてありますね。ここで紹介された『ベトザタ』という池はどういうところでしょうか。“水が動き始めたとき、最初に入る人は癒される”という伝説のある池ですね。しかし、ここに出てきた病気の人、38年前からずっと横たわっているのに、誰も池に運んでくれませんでした。「誰かが池に運んでくれれば、私は癒されるのに。」と、残念な、もどかしい気持ちで38年間ずっと横たわっていたのです。その人をイエス様が癒された物語ですね。38年間、手を差し伸べてくれる人が一人もいなかったのです。それをイエス様はご覧になったのです。そして、「起き上りなさい。床を担いで歩きなさい。」という言葉によって癒されたのです。

皆様は、この世の中をどう思われますか。「情けない世の中だ。」と言いながら、自分もその情けない対象になっていないでしょうか。助けを必要としている人に手を差し伸べるために、どのくらい積極的に生きていますでしょうか。「自分も助けが必要なことから、人に手を伸ばすのは無理です。」とっていないでしょうか。

今日の話で、イエス様の心はどのくらい痛かったでしょうか。38年間といえば、普通の人の人生の半分以上です。38年間、誰も助けてくれなかったのです。皆様、これはあり得ないことだと思われるでしょう。しかし、自分の心の中をよく覗いてみてください。私たちの無関心によって、このようになっている関わりがないでしょうか。

次に、もう一つ私の心を痛めたのは、ユダヤ人たちです。「ユダヤ人たちはイエスを迫害し始めた。」と書いてあります。理由は、“安息日にはしてはいけないことをしたから”です。当時の律法の中には、「安息日には重荷を運んではいけない。」と書かれていました。イスラエル人は律法の文字に縛られていましたから、安息日には重荷を運ばないのは当然だと考えていました。だから、重荷を運ぼうとするのは悪い人だと思えます。病気の人が立ち上がったことに感動し、「よかった！」と一緒に喜ぶ気持ちも見せず、「してはいけないことをしている。」と言って責めようとするユダヤ人たちの姿が書かれています。

では、私たちはどうでしょうか。私たちにもいろいろな法律があります。守らなければならない掟もあります。常識的として守るべきマナーもたくさんあります。それを拒んでいる人、犯している人を見る私たちの目はどうでしょうか。その人の立場になって「なぜそれを破ったのか。」を理解しよう

としたことがあったでしょうか。何よりも先に、「あの人はおかしい。」「なぜ守らないのか。」と嫌な気持ち、嫌な目でその人を見ていないでしょうか。皆様、こういうことにぶつかる時、まずその人の立場に立ち、なぜそういうことをしたのか、考えてみるべきです。もしそれが罪ならば、理解しようと努力するべきです。もしそれが失敗だったのなら、人間は失敗する動物だからそういうことはあり得る、とゆとりのある心を見せるべきです。

今日の福音の、ユダヤ人たちの頑なな心、そして病気の人に38年間誰も手を伸ばさなかった雰囲気を考えてみたら、今の時代の私たちにも一つの刺激になると思います。これは、昔話ではありません。今はもっとひどく、こういうことが起こっているのかもしれない。

私はよく、一番理想的な人間はどういう人間かと考えます。皆様は、どう思われますか。頭のよい人でしょうか、体力のある人でしょうか。しかし、私たちの心に浮かぶ理想的な人は、ただ一つだと思います。それは『心の温かい人』です。心の温かい人に出会ったら、まわりの人はみんな癒されます。皆様も温かくなりたいでしょう。温かい人と言われたいでしょう。では、そのようになしてください。なれます。一緒に温かい世界を作りましょう。できます。「なぜこんなに冷たいのか」と心を痛める前に、ご自分が先に温かさを見せるように頑張ればよいのです。この世の中で一番人を感動させるものは、温かさだと思います。何があっても懐に抱きしめようとする心を見たら、やはり私たちは感動します。そして感動の中に生きる意味が生じます。

昔話を一つ紹介します。ある有名はお坊さんがいました。その人はいろいろと不思議な能力を持っていました。ある日、そのお坊さんが山を散歩していると、一匹の小さいネズミが丸太と丸太の隙間に挟まれて、もがいていました。かわいそうに思い、丸太を動かしてネズミを助けてあげました。そして、他の動物に襲われないように、ネズミをお寺で飼うことにしました。ネズミは、お寺でエサをもらい「守ってくれる人がいるから大丈夫。」と安心して幸せに暮らしました。

ある日、お寺に猫が来ました。ネズミは怖くなり、猫が現れてからは閉じこもってしまい、何もできなくなりました。そこでお坊さんに頼みます。「猫が怖くてしかたありません。どうか私を猫に変えてください。」と。あまり熱心にせがまれて、お坊さんは「わかった。」と言い、ネズミを猫に変えてあげました。猫になったネズミは嬉しくなり、木の上や屋根の上に登って遊びました。ところが何日かすると、お寺に犬が現れました。ネズミであった猫は、その犬を見てお寺に逃げ込み、またお坊さんに頼みました。「私は、犬が怖いです。噛まれて死ぬかもしれません。どうか私を犬に変えてください。」と。それを聞いたお坊さんは、今度はネズミを犬に変えてあげました。犬になったネズミはすっかり有頂天になり、怖いものがないような気持ちになります。ところが今度は、虎が現れます。ネズミは「怖い」と思い、またお寺に逃げ帰ります。そしてまた、お坊さんに頼みます。「私は虎が怖くてしかたありません。どうか私を虎に変えてください。」と。それを聞いたお坊さんは、今度も願いを聞いてネズミを虎にしてあげます。虎になったネズミは、もうどこに行っても怖いものはないのだろうと思い、お寺の外に出かけます。ところが、出かけてみると別の虎が何匹もいるのに出会います。そ

して、それを見た自分が知らないうちにものすごく震えていることに気付きます。そこでまた山に登り、お寺に戻ってお坊さんに聞きます。「私は、虎になっても他の虎を見たら知らないうちに震えていました。どうしたらよいのでしょうか。」そのときお坊さんは、ただひとこと言いました。「外見が虎になっても、それより大きな生き物になっても、お前の心はネズミだ。何になってもお前の心はネズミで生き、ネズミで死ぬはずだ。心を変えられなければ、外見をいくら変えてもそれは何の役にも立たない。」

この物語は、「私たちは心をどのように持つべきか。どのように耕すべきか。」について話しているのだと思います。信仰の生活をして、毎日ミサに与り、いろいろな掟を守っていても、心の中に感動がなければ、動きがなければ、温かさがなければ、私たちもネズミのような生き方をするしかないのかもしれない。

ありがとうございました。